

基本文型としての「のだ」文

— 「のだ」の教え方」再考を含めて —

庵 功 雄

1. はじめに

「のだ」についてはこれまで数多くの研究がある。筆者も、日本語教育文法⁽¹⁾の立場からいくつかの研究を公刊してきた(庵 2000, 2013b, 2018, 庵・高梨・中西・山田 2000, 2001)。その後、「日本語の基本文型」を考える際に、「のだ」文を特別扱いすることが日本語の構造を考える上で重要ではないかという考えに至った。本稿では、こうした立場から、「のだ」の捉え方について再考してみたい。

2. 「のだ」の教え方再考⁽²⁾

筆者は、庵(2013b, 2018)、庵・三枝(2013)などで「のだ」の教え方について考えてきた。その考え方は基本的に変わらないが、学習者にとってよりわかりやすい流れを考えてみたい⁽³⁾。

2.1 必要な意味特徴

「のだ」を、学習者が産出できるように記述するためには、次の3つの意味特徴、すなわち、「関連づけ」「前提-焦点関係」「情報の発見」(庵 2013b, 2018, 庵・高梨・中西・山田 2001)が必要である⁽⁴⁾。以下、導入の順序にそくして考えていく。

2.2 関連づけ

1つ目の意味特徴は「関連づけ」である。次の2例を比べてみよう。

- (1) (a)会社からの帰りに雨が降った。 (b)○まだ道が濡れている。
- (2) (朝起きて外に出た) (a)道が濡れている。 (b)?昨夜雨が降った。

(1) と (2) は「雨が降る」「道が濡れている」という2つの出来事に関わる例だが、因果関係の順序が異なっており、「原因→結果」の順である(1)では(b)が無標(「のだ」なし)でも自然だが、「結果→原因」の順である(2)では(b)が無標だと不自然である。ここで、(1b)(2b)に「のだ(んだ)」をつけてみる。

(3) (a)会社からの帰りに雨が降った。(b)?まだ道が濡れているんだ。

(4) (朝起きて外に出た) (a)道が濡れている。(b)○昨夜雨が降ったんだ。

このように、「のだ」は因果関係を逆転させて述べる際に使われる。ここで、(4b)を(4a)との関連で見ると、(4b)の「のだ」は、(4b)文(「のだ」文)⁽⁵⁾が(4a)と関連を持っていることを表していると考えることができる。こうした「のだ」の機能を「関連づけ」と呼ぶ(野田1997, 庵・高梨・中西・山田2001)。なお、(4)のような場合の「のだ」は原因・理由を表し、基本的に「からだ」で置き換え可能である。

(4)では「のだ」で関連づけられる対象が「文」(4a)であったが、そうした対象が次の(5)のように「状況」である場合もある。

(5) (デパートで子どもが泣いているのを見て) あの子、迷子になったんだ。

こうした場合、「のだ」は状況に対する話し手の解釈を表し、基本的に「からだ」では置き換えられない(久野1973)。

さらに、「関連づけ」には(6)のように先行文(連続)を言い換える場合もある。

(6) 田中さんは16歳から18歳までカナダで過ごした。カナダの高校で勉強したのだ。

(6)の「のだ」文(における「のだ」)は、(6)の意味解釈において、「田中さんは16歳から18歳までカナダで過ごした」=「(田中さんは)カナダの高校で勉強した」が成り立つことをマークしている。

こうした「のだ」は、論文、評論文、専門の教科書、(新聞・雑誌の)記事など、アカデミック・リーディングの対象となるタイプのテキストでは最も多い用法である。

また、次のように、言い換えの対象が複数文に及ぶ場合もある。

(7) 「詩と」事実との関係が問われるようになったのは、文学を成立させていた強固な枠組みが緩み始めたからだ。文学は日常と地続きのものとして捉えられるようになる。それが宋詩の日常化といわれるものであり、文学の伝統にはかつて取り上げられることのなかった素材、感情、思考がどっと入ってくるようになる。(a)「詩を囲っていた枠が解体し、現実との間に障

壁がなくなったがために、詩は事実と一致しているかどうかが問われるようになった」のである。(浅見洋二「形似」の変容)

(7a) は波線部の内容を [] 部の内容に言い換えている。つまり、下線部の内容と [] 部の内容は意味的に等価になっている。

本小節で見た「のだ」においては、「のだ」は、「のだ」文が先行文(連続)または状況と関連を持っている(関連づけられる)こと、言い換えれば、「のだ」文を先行文(連続)または状況と関連づけて解釈すべきであることを示している⁽⁶⁾。

2.3 関連づけを含む疑問文

2.2 で見た3つのタイプのうち、「原因・理由」と「関連づけ」は疑問文になることは少ないが、「状況に対する解釈」は、話しことばにおいて疑問文でも頻用される。

(8) (2人が将棋を指しているのを熱心に見ている人に) 将棋がお好きなんですか?

(9) (外から帰った人の傘が濡れているのを見て) 雨が降っているんですか?

(8)(9) は (5) の平叙文に対応する疑問文である。

(5) (デパートで子どもが泣いているのを見て) あの子、迷子になったんだ。

例えば、(8) は「(聞き手が) 熱心に将棋を見ている」という状況の解釈を、「(あなたは) 将棋が好きだ」と解釈してもよいかということを知りたくて尋ねている。

(8) の代わりに、(10) という非「のだ」文を使うことも可能だが、そうすると、(10) 文は (8) の状況と無関係に(独立に) 発せられたことになり、日本語のテキストの特徴が失われる(菊地 2006)。

(10) 将棋はお好きですか?

また、(9) に対応する非「のだ」文(11) は座りが悪いため、こうした環境で「のだ」疑問文⁽⁷⁾が使えるようになる必要がある(菊地 2006)。

(11) ?雨が降っていますか?

ここで注意すべきことは、このタイプの「のだ」疑問文は必ず「状況に対する解釈」と解釈されることである。言い換えると、このタイプの「のだ」疑問文を使うと、聞き手は何らかの状況を思い浮かべることになる。もちろん、適切な状況があってそれに対する解釈として述べる分には全く問題はなく、むしろ、「のだ」疑問文を使うべきである。しかし、単に命題の真偽のみを尋ねたいときに、「のだ」疑問文を使ってしまうと、聞き手に不快感を与えてしまう可能性がある(高い)ので、

注意が必要である。

- (12) a. 田中さんは大学生ですか?
 b. 田中さんは大学生なんですか?

例えば、「田中さんが大学生であるか否か」だけを聞きたいときに(12b)を使ってしまうと、聞き手を不愉快な気持ちにしまう危険性が高い。こうした危険性は、特に、(通常副次補語を伴わない)形容詞文、名詞文で高いので、初級段階では、形容詞文、名詞文では「のだ」疑問文を使わせないなどの配慮が必要である(庵・高梨・中西・山田 2000)。

2.4 前提—焦点関係

このように、「のだ」疑問文には「状況への解釈の可否を尋ねる」タイプがあるが、状況への依存性がそれとは異なる「のだ」疑問文もある。次例を考えてみよう。

- (13) a. (山田さんに向かって) 山田さんはビデオカメラを持っていますか?
 b. (山田さんに向かって) ?山田さんはビデオカメラを持っているんですか?

- (14) (山田さんが新しいビデオカメラを手に見ているのを見て)

山田さんは秋葉原でそのビデオカメラを買ったんですか?

(13b) が不自然なのは、(12b) と同様に説明できる。一方、(14) に関しては、2.2 節で見たような意味での状況への依存性は認めにくい。ただし、(14) においても、() 内の状況が必要であるのは確かである。

(14) の「のだ」は、「のだ」疑問文が前提を持っていることを表す⁽⁸⁾。「前提」というのは、その文の中で既にわかっている内容(命題)である。前提がある場合には焦点も存在する。「焦点」というのは、その文の中で、まだわかっていない内容である。

- (15) 山田さんが X (場所) でビデオカメラを買った (こと)

- (16) X=秋葉原?

このように考えると、(14) は(15) を前提として (=話し手が知っているものとして)、(16) が焦点として適切であるかを尋ねる文であると言える⁽⁹⁾。

なお、WH 疑問文には常に前提が存在するので、WH 疑問文では常に「のだ」が使われる(少なくとも、「のだ」を使って問題になることはない)ので、「のだ」疑問文を使っても(12b) のような問題が生じることはない⁽¹⁰⁾。

(17) (山田さんが新しいビデオカメラを手にしているのを見て)

山田さんはどこでそのビデオカメラを買ったんですか？

(18) X = ?

つまり、(14) と (17) の前提はともに (15) であり、両者の違いは、非 WH 疑問文の場合は X の候補を具体的に挙げるのに対し、WH 疑問文の場合は (18) のように候補を挙げないという点にある。

疑問文における「前提—焦点関係」の議論は、そのまま否定文にも適用できる(庵 2013a, 2013b, 2018)。次例を考えてみよう。

(19) 私は彼が金持ちだから結婚しなかった。

(20) 私は彼が金持ちだから結婚したのではない。

(19) と (20) は似ているが、意味は全く異なり、(19) が「私は彼と結婚しなかった」ことを表すのに対し、(20) は「私は彼と結婚した」ことを表す。これは、「のだ」否定文⁽¹¹⁾における「のだ」は(本小節で扱った「のだ」疑問文と同様)その文に前提があることを表すと考えるとうまく説明できる。

つまり、(19) のような非「のだ」否定文の場合は、単に「結婚した」という述語を否定しているだけである⁽¹²⁾(これは、非「のだ」疑問文が命題の真偽を尋ねるだけであることに対応する)のに対し、(20) のような「のだ」否定文は、その文に前提があることを表す。(20) の前提は (21)、焦点は (22) である。

(21) 私は X (理由) で (彼と) 結婚した。

(22) X ≠ 彼が金持ちだから

このように考えると、「のではない」は無理なく導入できると考えられる(庵 2013a)。

なお、「のだ」否定文では、焦点が否定されているだけで、焦点が本当は何であるかはわからず、聞き手は宙ぶらりんの状態に置かれる。そのため、「のだ」否定文(「のではない」)のあとには、焦点を特定する「のだ」文が続くのが普通である(石黒 2003, 庵 2013a)。

(23) 私は彼が金持ちだから結婚したのではない。(彼が)優しいから結婚したのだ。

X ≠ 彼が金持ちだから

X = 彼が優しいから

2.5 情報の発見

「のだ」の主要用法をカバーするために必要な最後の意味特徴は「情報の発見」

である。次例を考えてみよう。

(24) A: 山田さん, 来週アメリカ留学に出発するそうだよ。

B: {来週 (アメリカ留学に) 出発する/ そうな} んだ。

(24B) の「のだ」は (24A) の発話を通して初めて「山田さんが来週アメリカ留学に出発する」という情報を始めて知ったことを表している。

こうした情報の取り入れは言語的情報によるだけでなく、次のように非言語的情報による場合もある。

(25) (結婚式の招待状を見て) 田中さん, 結婚するんだ。

また、発話時以前に認識したものの発話時において忘れていた情報に発話時に再度アクセスした場合には、「のだった」が使われる (庵 2006)。

(26) (会議のリマインドメールを見て) 明日会議があるんだ。

2.6 「のだ」とモダリティ表現

「関連づけ」を表す「のだ」文のうち、「理由」と「状況に対する解釈」の場合は、「のだ」にモダリティ表現が後接することがある。次例を考えてみよう。

(27) (朝起きて外に出た) 道が濡れている。昨夜雨が降ったんだ。(= (4))

(28) (朝起きて外に出た) 道が濡れている。昨夜雨が降ったんだろう。

(27)(28) はいずれも「道が濡れている」という事態の「理由 (原因)」として、「昨夜雨が降った」ことを考えているという話し手の考えを述べている点では共通している。違いは、その考えの確信度であり、(27) はそれ以外の可能性を考えていないのに対し、(28) は 100% そうだとは言いきれないことを表している。つまり、(28) の「のだ

(29) 来週田中さんは帰ってくる \varnothing 。 (27) 昨夜雨が降ったんだ \varnothing 。

(30) 来週田中さんは帰ってくるだろう。 (28) 昨夜雨が降ったん(だ) だろう⁽¹³⁾。

なお、「のだ」に後接する認識的モダリティ形式は「だ

3. 「のだ」文の機能

前節では「のだ」の教え方という観点から、「のだ」文の記述に必要な意味特徴を取り出した。主な例文を再掲してみよう。

- (4) (朝起きて外に出た) 道が濡れている。昨夜雨が降ったんだ。
- (5) (デパートで子どもが泣いているのを見て) あの子、迷子になったんだ。
- (6) 田中さんは16歳から18歳までカナダで過ごした。カナダの高校で勉強したのだ。
- (8) (2人が将棋を指しているのを熱心に見ている人に) 将棋がお好きなんで すか?
- (14) (山田さんが新しいビデオカメラを手に入れているのを見て)
山田さんは秋葉原でそのビデオカメラを買ったんですか?
- (20) 私は彼が金持ちだから結婚したのではない。
- (24) A: 山田さん、来週アメリカ留学に出発するそうだよ。
B: {来週 (アメリカ留学に) 出発する / そうな} んだ。

これらの文に共通する「のだ」の機能は次のようにまとめられる。

- (31) 「のだ」は、「のだ」文が「文脈」と関連を持っていることを明示する
(4)~(6) については、「関連づけ」ということの定義から考えて、(31) が成り立つことは問題ないだろう。(5) の疑問文版である (8) も問題ない。(24) の「のだ」は相手の発話や非言語的情報から当該の情報を得たことをマークしているのので、この場合も (31) が成り立つと考えてよいだろう。

これに対し、(14)(20) は「関連づけ」を表すわけではないので、(27) は成り立たないように思われるかもしれない (実際、野田 (1997) の「スコープの「のだ」」という概念は「関連づけ」とは相容れないと思われる)。しかし、(14) のような前提を持つ疑問文がいきなり使われることはなく、何らかの状況が共有されている必要がある。例えば、(32) が発せられるのは、話し手が「聞き手が学校を休んだこと」を知っている場合に限られ、(33) は「コップが割れている状況」でのみ発せられる。

- (32) 昨日は風邪で学校を休んだの?
- (33) だれがこのコップを割ったんですか?

また、(20) のような前提を持つ否定文が使われるのも、焦点に当たる部分が先

行文脈で話題に上っている場合に限られる。

(34) 藤村：大丈夫、蟻田さんという選挙の神様がついていれば間違いなし
—。

蟻田：つくかどうかはまだ分かん。

藤村：コレ次第ですかね？

蟻田：ふざけちゃいかん。私はカネが欲しくてこの道に入ったんじゃない。い。選挙が面白いからやってるんだ。

(ジェームス三木「善人の条件」)

例えば、(34)では「これ(=金)次第で選挙に協力するのか」と聞かれて、蟻田は「金が目的ではなく、選挙が面白いから選挙に協力するのだ」ということを述べるために「のだ」否定文を使っているが、このことから、(34)が「選挙に協力する」ことを前提として、その理由を問題にしている文脈であることがわかる。

以上の議論から、「前提—焦点関係」を表す「のだ」でも(31)は成り立つと言える。

4. 基本文型としての「のだ」文

以上の考察を踏まえ、日本語の基本文型における「のだ」文の位置づけについて考える。

4.1 日本語の基本文型

ここでは、日本語の基本文型について考えるが、この部分の考察は暫定的なものであることを断っておく。

日本語の文の分類の基本として、述語のタイプによる以下の分類を採用する。

(35) 動詞文、形容詞文、名詞文

動詞文の下位分類として、次の2種類を認める。

(36) a. ～は／が+必須補語+動詞⁽¹⁴⁾

b. ～は／が+補語(動作主)<+補語>+動詞(使役的表現, 間接受身)

ここで、「が」は基本的に主語を表す⁽¹⁵⁾が、「は」には主語でもある場合と主語ではない場合がある(庵 2018)。

(36b)は文の主語が動作主ではない間接関与を表すもので、次のようなもの

がある⁽¹⁶⁾。

- (37) 太郎は息子を買物に行かせた。(使役文)
 (38) 私は田中さんにピアノを弾いてもらった。(テモラウ文)
 (39) 私は田中先生に(先生の)パソコンを使わせていただいた。(使役テモラウ文)
 (40) 太郎は妻に家出された。(間接受身文)

次に、形容詞文には次の2類型を認める。

- (41) a. XはY。
 b. XはYがZ。⁽¹⁷⁾

最後に、名詞文には次の2類型を認める⁽¹⁸⁾。

- (42) a. XはY。(措定文) YがX。は不可
 b. XはY。(指定文) YがX。は同義で可能。

4.2 「のだ」の位置づけ

以上の考察を受けて、基本文型の中での「のだ」文の位置づけを考える。

4.2.1 準詞(助動詞)としての「のだ」

三上(1953)は、本稿で考察している「のだ」は「の+だ」ではなく、「のだ」全体で1語として機能する「準詞」(助動詞)であるとしている。

- (43) 雨 {が/の} 降る日 (は客の入りが悪い。)
 (44) 明日は雨 {が/*の} 降る。
 (45) 手紙 {が/*の} 来たのが遅れたのだ。(三上1953: 234-235)
 (46) 私が探している手紙は田中さん {が/の} 書いたのだ。

共通語では、(43)のような連体修飾節の中では主語を「が」ではなく「の」でマークできる。これを三上は「ガーノ可変」と呼んでいるが、(44)のような文ではこれは不可能である。この基準で(45)と(46)を比べると、(46)ではガーノ可変は可能で、これは「のだ」の「の」が名詞性を残していることを示している。一方、(45)ではガーノ可変は不可能なので、この場合の「のだ」は「の+だ」とは考えられないというのが三上の論拠である。この基準は、後に寺村秀夫氏が「ムード」を表す形式として「わけだ、はずだ、ものだ、ことだ」などを認定する際に用いられ、日本語教育にも大きな影響を与えた。

4. 2. 2 「のだ」+ α 」の形式

このように、「のだ」は品詞的には助動詞（三上の言う「準詞」）である。一方、2. 6節で見たように、「のだ」を含む表現には「のだ+ α 」、すなわち、「のだ」の意味+ α の意味」と分析できるものが存在する。2. 6節で見たもの以外では次のようなものである。

1. ~のですか？（関連づけの疑問文）

(47) (2人が将棋を指しているのを熱心に見ている人に) 将棋がお好きなんですか？ (= (8))

2. ~のか。(納得)

(48) (時計を見て) もう9時か。

(49) (台風が接近しているというニュースを見て) 台風が近づいてるんだ。

(50) (台風が接近しているというニュースを見て) 台風が近づいてるのか。

3. ~のではないか。(否定疑問)

(51) (デパートで子どもが泣いているのを見て) あの子, 迷子になったんだ。

(52) あそこにいるのは田中君じゃないか？

(53) (デパートで子どもが泣いているのを見て) あの子, 迷子になったんじ
ゃないか？

2. 3節で見たように、(47) のような「関連づけの疑問文」は、「聞き手が2人が将棋を指しているのを熱心に見ている」という状況に対して、話し手が「(あなたは)将棋が好きだ」という解釈を立て、それが正しいかどうかを聞き手に尋ねる文である。つまり、このタイプの「~のですか」は「「~のだ」+「疑問の「か」」と分析できる。

次に、(50) のような「納得」の用法についてである。「か」には、(48) のように、その場で情報を取り入れ納得したことを表す用法がある。一方、「のだ」には、2. 5節で見たように、「情報の発見」という用法がある。(49) がその例である。ここで、(50) のような「のか」は、(48) とほぼ同様の意味を表し、「の」の部分は「情報の発見」を表すと考えられる。したがって、全体として、「のか」は「「~のだ」+「納得の「か」」と分析できる。

最後に、(53) のような「~のではないか」である。上と同様の議論から、(53) が表す意味は、(51) のような「状況の解釈の「のだ」」の意味と、(52) のような「(名詞+) ではないか」が表す「否定疑問」の意味を加えたものと分析できる。

このように、「のだ」+ α 」と分析できる表現はかなり存在するが⁽¹⁹⁾、2. 6節で

見たように、こうした形式と「無標（形式ゼロ）+ α 」の違いは「のだ」の有無だけということになる。すなわち、「のだ」は無標形式とパラディグマティックな関係にある。

(54) 無標+ α Ex. 雨が降った \varnothing +だろう。(α =だろう)

(55) のだ+ α 雨が降ったのだ+だろう。(α =だろう)

(のだ：「文脈」との関連を持つことを明示する)

4. 2. 3 モダリティ形式と「のだ」

前小節では「のだ」にモダリティ形式などが後接する場合について考えたが、「のだ」の分布としては、次のように、モダリティ形式に「のだ」が後接する場合もある。

(56) 明日は雨が降る {*だろう／と思う／かもしれない／はずな／にちがない／ような／らしい／そうな} のだ。

(57) 明日は雨が降りそうなのだ。

(58) もちろん、リスは保護されている。が、あまりにふえすぎると森林が荒らされるので、すこしは獲ってもよいことになっているらしい。とはいっても、料理屋でつかうほどは獲れないから、あくまで家庭用だそうである。うまいリスのパイがつかれるかどうか、カナダの主婦の腕のふるいどころというわけなのだ。(開高健「小説家のメニュー」。BCCWJ: PB39_00266)

(59) 一階も、二階も同じフローリングの床だというのに、一階にはスリッパが一足もないのである。なぜそうしているのか、やっとわかった。足音でもその人の体調をかぎとってしまう先生にとって、スリッパを履いたときのペタペタした足音は、からだが発する大切な診断材料をひとつ奪い取ってしまうことになるからなのだ。(金沢英子「鍼を打つ人竹村文近：心とからだ、目覚めへの旅」。BCCWJ: LB14_00020)

(60) *明日は雨が降る {かな／かしら／だろうか／ね／よ} のだ。

(56)(57) から、認知的モダリティの場合、「だろう」を除いて「のだ」が後接し得る（「と思う」を含める）⁽²⁰⁾。また、(58)(59) から、「説明のモダリティ」とされる「わけだ」および「のだ」「わけだ」とパラディグマティックな関係にある「からだ」にも「のだ」が後接し得る。一方、(60) から、「かな、かしら、だろうか」などの「疑い」を表す形式や終助詞などの対人的モダリティ形式には「のだ」

は後接し得ない (仁田 2002 参照)。

(61) a. 明日は雨が降る { φ /*だろう/かもしれない/はずな/にちがいない/ような/らしい/そうな} のだ。

b. 明日は雨が降りそうなのだ。 (= (57))

(62) ??明日は雨が降るかもしれない はずだ。

まず, (60) に挙げる形式に「のだ」が後接できないのは, 「のだ」が基本的に対事的モダリティ形式であるためである⁽²¹⁾。

一方, (61a, b) において, 「 φ 」は「明日雨が降る」という命題の成立について話し手が100%の確信を持っていることを表す。寺村 (1984) はこうした表現を「確言」と称している。これに対し, 「だろう」以下の認識的モダリティ形式は同じ命題の成立について話し手が100%の確信は持っていないことを表している。寺村 (1984) の用語では「概言」である。つまり, 「だろう」以下の形式は「概言」という同じ意味カテゴリーに属し, 互いにパラディグマティックな関係にあり, したがって, (62) からわかるように, 互いに共起できない⁽²²⁾。一方, 「のだ」は認識的モダリティ形式と共起できる。以上をまとめると, 次のように言える。

(63) 「のだ」は (基本的に) 対事的モダリティ相当の形式であるが, 他のモダリティ形式とは異なり, 「概言」を表すことを基本的機能とせず, 他の形式と共起し得る。

4. 2. 4 「のだ」のテキスト的機能

2節, 3節で見たように, テキスト的には, 「のだ」は, 「のだ」文が「文脈」と関連を持っていることを明示する機能を持っている。

一方, 庵 (2019) で指摘したように, 「のだ」はタクシスの関係を表す (cf. 三上 1953)。すなわち, 「のだ」は背景化 (background) を表すマーカーである⁽²³⁾。

4. 3 基本文型としての「のだ」

4. 2節の考察をまとめると, 次のようになる。

(64) a. 「のだ」は, 「のだ」文が「文脈」と関連を持っていることを明示する

b. 「のだ」は品詞的には助動詞 (準詞) である

c. 「のだ」には認識的モダリティ形式などが後接し, 「のだ+ α 」の意味を表す。つまり, 「のだ」は無標形式とパラディグマティックな

関係にある

- d. 「のだ」は意味的には対事的モダリティ形式相当であるが、他の対事的モダリティ形式とは異なり、概言を表すことを基本的機能としない

- e. 「のだ」はテキスト的には背景を表し、タクシスの関係を表す

「のだ」は助動詞であるが、「だろう、かもしれない、ようだ」などの認識的モダリティ形式とシンタグマティックな関係にある。この点で、「のだ」は同じく「助動詞」と言っても、認識的モダリティ形式とは統語機能が異なると考えられる。さらに、「のだ」文は「文脈」と関連があることを明示するという点で、日本語における1つの文の述べ方を表していると言え、その点からも基本文型の1つに加えるべきであると考えられる。

以上を踏まえ、現時点で筆者が考える日本語の基本文型は以下の通りである。

(65) 1. 動詞文

- a. ～は／が+必須補語+動詞
 b. ～は／が+補語(動作主)〈+補語〉+動詞(使役的表現, 間接受身)

2. 形容詞文

- a. XはY。
 b. XはYがZ。

3. 名詞文

- a. XはY。(指定文) YがX。は不可
 b. XはY。(指定文) YがX。が同義で可能。

4. 「のだ」文

5. まとめ

本稿では、「日本語の基本文型」という観点から、「のだ」文について再考した。まず、「のだ」の教え方について、これまでの拙論の考え方を部分修正したものを提示した。次に、「のだ」を、「のだ」文が「文脈」と関連を持つことを明示する文法形式として位置づけた。さらに、「のだ」文が無標の文とパラディグマティックな関係にあることを指摘し、そうした点からも、「のだ」文を日本語の基本文型の中に位置づけるべきであると結論づけた。

謝辞

本稿は科研費 21H00552（研究代表者：大津由紀雄）の研究成果の一部である。

注

1. 日本語教育文法に関する筆者の考え方については、庵（2011, 2015, 2018）を参照。
2. 本節の内容は、庵（2022）を敷衍して、庵（2013b）の内容を一部修正したものである。
3. 庵（2013b）、庵・三枝（2013）では、2. 4節→2. 2節→2. 3節という順の導入を提案したが、その後の考察の結果、本稿の順序の方がよりわかりやすいという結論に至った。
4. 「のだ」が表す意味素性を複数立てて説明する論考に田野村（1990）がある。同書では「承前性」「既定性」「披瀝性」「特立性」という4つの意味素性が立てられている。本稿（およびそれに至る旧稿）も形式上は田野村氏の論考に近いが、2節に挙げる「関連づけ」「前提—焦点関係」「情報の発見」という素性は、日本語学習者が「のだ」を産出するために必要な意味特性に特化している点で田野村氏の問題意識とは異なり、それぞれの意味素性の外延も一致しない。
5. (4b) のような「のだ」で終わる文を「「のだ」文」と呼ぶことにする。
6. 「のだ」文を先行文（連続）または状況と関連づけて解釈すべきであることを示すということは、理解過程から見た捉え方であり、書きことばにおいては、「「のだ」があれば、それを「言い換え」（または、先行文の「理由」と解釈せよ）」というストラテジーは（極めて）有力であることを示している。一方、産出面から言うと、「のだ」文が「言い換え」と捉えられやすいということは、「のだ」文を多用すると、言い換えられる対象の文（連続）を述べる意義がなくなることを意味するので、「のだ」は多用すべきではないということになる（庵2018）。
7. 「のですか？」「んですか？」「の？」のように、「のだ」を含む疑問文を「「のだ」疑問文」と呼ぶことにする。
8. 本小節で扱う「のだ」疑問文、「のだ」否定文は、基本的に野田（1997）の「スコープの「のだ」」に対応するが、両者は全同ではない。両者の違いについては庵（2000）を参照。
9. (14) に対するこの解釈は無標のものである。無標の焦点位置は統語的に決定され（田窪1987）、その要素にプロミネンスを置く必要はない。一方、(14)の焦点を「そのビデオカメラを」とすることも可能だが、そうした有標の焦点位置を取る場合は、その部分にプロミネンスを置く必要がある（庵・高梨・中西・山田2000）。
(ア)（山田さんが新しいビデオカメラを手に見ているのを見て）
山田さんは秋葉原でそのビデオカメラを買ったんですか？（ゴシックはそこにプロミネンスが置かれることを表す）
10. ただし、これには一定の例外があるようである（庵2021参照）。
11. 「のではない」「んじゃない」「ではありません」のような「のだ」を含む否定文を「「のだ」否定文」と称する。
12. これは、久野（1983）などの言い方で言えば、「ない」のスコープは直前の述語までし

か及ばない（したがって、それより前の要素をスコープに入れるためには「の」が必要）ということである。

13. 「のだろう」「のかもしれない」などでは「のだ+だろう、かもしれない」の「のだ」の「だ」は表層では脱落する。
14. 必須補語の数と種類（格枠組み case frame。仁田 1980 の用語では「格体制」）は述語の語彙情報に登録されている（仁田 1980）。
15. 「が」には主語以外を表すものもあるが、本稿では扱わない（庵 2018 参照）。
16. （経験的）間接関与を表す諸構文について詳しくは天野（1991）、益岡（1979）、寺村（1976, 1982）などを参照されたい。
17. 「ハーガ構文」について詳しくは、三上（1960）、菊地（1990, 2010）、野田（1996）などを参照。
18. 指定文と措定文について詳しくは、三上（1953）、西山（2003）、Iori（2017）などを参照。
19. この点に関するより詳しい分析は田野村（1990）を参照されたい。
20. 「だろう」に「のだ」が後接しないのは、(イ)に見られるように「だろう」が南（1974, 1993）の B 類従属節に入りにくいと同様の統語的制約であると考えられる。
(イ) 明日は雨が降る {ok φ /??だろう/ok かもしれない} のに、彼は出かけるようだ。
21. 「これから説教するから、そこに座るんだ。」のような対人的モダリティとしての用法もある（野田 1997）が、「のだ」全体からすれば周辺的な用法である。
22. 「と思う」は統語的にはト節を取るため、他の認識的モダリティ形式と共起できる。そのため、(61) では「と思う」を除いている。
23. 仁田（2009）で指摘されているように、語りの文体においては、認識的モダリティ形式も背景化の機能を持つと考えられるが、「のだ」は、テキストタイプにかかわらず、背景化の機能を持つ点で、他のモダリティ形式とは異なると考えられる（庵 2019）。

参考文献

- 天野みどり（1991）「経験的間接関与と表現」仁田義雄編『日本語のヴォイスと他動性』くろしお出版
- 庵功雄（2000）「教育文法に関する覚え書き：「スコープの「のだ」を例として」『一橋大学留学生センター紀要』3, 一橋大学
- 庵功雄（2006）「モダリティ形式のタ形に関する一考察」益岡隆志・野田尚史・森山卓郎編『日本語文法の新地平 2 文論編』くろしお出版
- 庵功雄（2011）「「100% を目指さない文法」の重要性」森篤嗣・庵功雄編『日本語教育文法のための多様なアプローチ』ひつじ書房
- 庵功雄（2013a）「たかが「の」、されど「の」」『日本語教育、日本語学の「次の一手」』くろしお出版
- 庵功雄（2013b）「「のだ」の教え方に関する一試案」『言語文化』50, 一橋大学
- 庵功雄（2015）「「産出のための文法」に関する一考察」阿部二郎・庵功雄・佐藤琢三編『文

- 法・談話研究と日本語教育の接点』くろしお出版
- 庵功雄 (2018) 『一步進んだ日本語文法の教え方 2』くろしお出版
- 庵功雄 (2019) 『日本語指示表現の文脈指示用法の研究』ひつじ書房
- 庵功雄 (2021) 「「んですか」に関する一考察——日本語教育文法から日本語学への示唆——」第 11 回関西日本語研究会発表要旨
- 庵功雄 (2022) 「「のだ」のいろいろ」田中祐輔編・川端雄一郎・庵功雄・前田直子・牛窪隆太・陳秀茵・張玥著『日本語で考えたい科学の問い×15 [心と身体編]』凡人社
- 庵功雄・高梨信乃・中西久実子・山田敏弘 (2000) 『初級を教える人のための日本語文法ハンドブック』スリーエーネットワーク
- 庵功雄・高梨信乃・中西久実子・山田敏弘 (2001) 『中上級を教える人のための日本語文法ハンドブック』スリーエーネットワーク
- 庵功雄・三枝令子 (2013) 『上級日本語文法演習 まとまりを作る表現——指示詞, 接続詞, のだ・わけだ・からだ——』スリーエーネットワーク
- 石黒圭 (2003) 「「のだ」の中核的機能と派生的機能」『一橋大学留学生センター紀要』6, 一橋大学
- 菊地康人 (1990) 「「X の Y が Z」に対応する「X は Y が Z」文の成立条件」国広哲弥教授 還暦退官記念論文集編集委員会編『文法と意味の間』くろしお出版
- 菊地康人 (2006) 「受難の「んです」を救えるか」『月刊言語』35-12
- 菊地康人 (2010) 「日本語を教えることで見えてくる日本語の文法」『日本語文法』10-2
- 久野暲 (1973) 「ノデアル」『日本文法研究』大修館書店
- 久野暲 (1983) 『新日本文法研究』大修館書店
- 田窪行則 (1987) 「統語構造と文脈情報」『日本語学』6-5
- 田野村忠温 (1990) 『現代日本語の文法 I 「のだ」の意味と用法』和泉選書
- 寺村秀夫 (1976) 「「ナル」表現と「スル」表現——日英「態」表現の比較——」寺村秀夫 (1993) 『寺村秀夫論文集 II』くろしお出版に再録
- 寺村秀夫 (1982) 『日本語のシンタクスと意味 I』くろしお出版
- 寺村秀夫 (1984) 『日本語のシンタクスと意味 II』くろしお出版
- 西山佑司 (2003) 『日本語名詞句の意味論と語用論』ひつじ書房
- 仁田義雄 (1980) 『語彙論的統語論』明治書院
- 仁田義雄 (2002) 「2 認識のモダリティとその周辺」森山卓郎・仁田義雄・工藤浩『日本語の文法 3 モダリティ』岩波書店
- 仁田義雄 (2009) 「語り物の中のモダリティ」『仁田義雄日本語文法著作選第 2 巻 日本語のモダリティとその周辺』ひつじ書房
- 野田春美 (1997) 『日本語研究叢書 9 「の (だ)」の機能』くろしお出版
- 野田尚史 (1996) 『新日本語文法選書 1 「は」と「が」』くろしお出版
- 益岡隆志 (1979) 「日本語の経験的間接関与構文と英語の have 構文について」『林栄一教授 還暦記念論文集 英語と日本語と』くろしお出版
- 三上章 (1953) 『現代語法序説』くろしお出版から再版 (1972)

三上章（1960）『象は鼻が長い』くろしお出版

南不二男（1974）『現代日本語の構造』大修館書店

南不二男（1993）『現代日本語文法の輪郭』大修館書店

Iori, Isao (2017) "Brief survey of functional differences between the "topic" marker *wa* and the "subject" marker *ga* in modern Japanese," *Hitotsubashi Journal Arts and Sciences*. 58-1, 一橋大学

